

平成28年10月30日、元厚生労働事務次官で高知大学OGの村木厚子氏が、朝倉キャンパスで行われたホームカミングデーに合せて来学されました。記念講演の講師を務めていただくとともに、脇口宏学長と対談。高知大学への期待や地域に果たす役割について、大いに語っていただきました。

地域と丸ごと連携できるのが高知大学の強み

脇口 最近、地方創生に向けて、地方大学の役割が強く期待されています。しかし、地方創生が成功するためには、まず東京が出生率を上げて、地方から東京に若者が行くだけでなく、東京からも地方に若者が移ってくるという双方向の人材の流動性が必要です。では、地方大学である高知大学が教育力と研究力を生かして地域に対して何ができるのか。村木さんは長年、中央省庁で働いてこられました。その経験から高知大学が地方創生で果たす役割についてどのようにお考えですか？

村木 確かに出生率についても、東京が改善しないと問題は解決しません。方、地方の出生率も下がってはいけません。地方はまだリソース(資源)を都会に提供している状態ですが、地方の力をいかに強くできるのが、この国の運命を握っていると思います。

ただ、研究費や学生数に関しては、都市部の大学が上回っており、地方大学の単独の力では太刀打ちが難しいと思います。しかし、地方大学の強さは地域が味方してくれるところ。



集落活動センター：チーム稲生の部会の活動として実施している、びわの葉茶作りを体験(地域協働学部1年、実習科目「地域理解実習」)

学生の学びの充実に向けて大学ができることは

脇口 大学は、「教育」「研究」「社会貢献」の3つの柱をしっかり立てなければならぬと思います。なかでも教育は重要で、学生にとって大学は社会に出る一歩手前、最後の勉学の場です。ここで教えることは、社会で活躍する糧となるものでなくてはならないし、学生も頑張ればよいというだけでなく、成果を出さなくてはならない。大事な年齢の若者を預かるわけですから、私たちはいかにその責任を果たすかを考えなければなりません。そのためには、教員も学ぶ姿勢を背中で見せなければ学生はついてこない、と先生方に話しています。

村木 18歳から22歳というのは本当にいい年齢ですね。たとえ30代、40代のときに4年間学んでも、この世代のときの何分の一しか身につかないものです。彼らをどうやって育てていくか、教職員の方の責任は大きいですね。どうやって学生のチャレンジする気持ちを育て、学ぶ方法を身に付けさせるか、大学時代に学ばなければならぬこと

〈特集〉高知大学への期待 ～高知大学の可能性を語る～

元厚生労働事務次官

高知大学

村木厚子さん × 脇口宏 学長

たとえば、東京の大学が東京都と連携して何かを行う、という取組はなかなかできません。

一方、高知大学では高知県や高知市、あるいは地域の皆さんと連携できる。これは、地方大学である高知大学の最大の強みだと思います。

脇口 地域と連携するためには、県民や市民の皆さんに高知大学をよく知ってもらわ



いの町是友公民館：学生が企画発行した「是友地区広報誌「BOIL」」お披露目(地域協働学部2年、実習科目「事業企画プロジェクト実習」)

て、信頼できる大学だと認識してもらわなければいけません。そのためには、私たち大学が地域に出て、大学の情報を発信していかなければならないと思います。

村木 かつての大学は学内で完結しているものでしたし、大学の研究者の中には大学がある地域に思い入れのない方もおられたでしょう。そういう環境のなかでは、地域に開かれた大学という発想はなじめなかったと思います。それが近年、高知大学では「高知にある大学」としてどうするか、ということを考えてくださるようになりました。

は本当にたくさんあります。

脇口 特に初年次教育、共通教育が重要だと考えています。最初に大学で学ぶということの意味が心に響かなければ、なかなか勉強が進みません。とかく専門教育が重要視されますが、広く教養が身に付く共通教育があつてこそ専門教育が生きてくるのです。たとえば医師になったとき、患者さんやその家族の気持ちに寄り添えるようになるためには、社会常識と教養が必要です。しかし、専門教育の量が多い医学部では、なかなか教養教育に力を入れられないのが現状です。

村木 私が高知大学の先生に教わったことで、社会人になってから職場の後輩たちに伝

えていたことがあります。それは、人の仕事の能力をどのように測るのかということ。ある人はAという仕事を1単位、Bを2単位、Cは専門分野で7単位、Dを1単位、Eを1単位やったりします。すると、この人の仕事の射程距離は、一番専門で長くやった7に、AからEの5つの間口の広さをかける7×5になると教えられました。専門性は大切ですが、間口1だけだと掛け算が利いてきません。違う分野にも携わることで仕事の幅が広がり、掛け算で能力が高くなると。仕事をしてみても、本当にその通りだと思いました。

脇口 私がいつも言うのは、専門性を高くしたければ砂山をつくるようにしなければ

元厚生労働事務次官
村木厚子さん

高知県出身。昭和53年3月、高知大学文理学部経済学科卒業。同年、厚生労働省(旧・労働省)に入省。内閣府政策統括官、厚生労働省社会・援護局長などを歴任。平成25年厚生労働事務次官に就任し、27年に退官。28年、高知大学地域協働学部客員教授に就任。

高知大学長
脇口宏

愛媛県出身。昭和46年、岡山大学医学部卒業。54年から高知医科大学(現・高知大学医学部)に小児科医として勤務。平成13年、高知医科大学医学部教授、20年、高知大学医学部部長を経て、24年に高知大学学長に就任。現在に至る。



ならないということです。砂山を高くするために、すそ野が広げなければ高くなりません。広い教養のすそ野の上にこそ、高い専門性を築くことができるのです。

村木 高知大学のメリットは、学生と教員の距離が非常に近いところにあると思います。これは、学生にとって最大の武器。先生方には本気で愛情を注いでいただかなければなりません。私がマンモス大学にはない素晴らしいです。私が学生のときも、自主ゼミや読書会、勉強会などに付き合ってくれた先生が多く、そうすると少人数で先生を独占できるので、とても賢い環境で教えていただくことができました。

脇口 もっと学生たちに寄り添い、「この先生ならば相談に乗ってくれそうだな」という雰囲気をつくっていきたいと思います。距離が近いということは、ときには反発もあるのですが、そうしたことは社会でもよくあること。それをどうやって調整して、いい関係を築けるか。反発した後で親友になることもよくある話ですから、大事なことです。

地域の魅力の発揮に
大学が果たす役割

村木 高知の人柄というのは、新しいものが好きで率直。あまり奇をてらわずに正面からぶつかっていくと、きちんと反応が返ってくる。そういう意味では、大学がどどん地域に出ていけば、理解を得て、応援団が増えるのではないのでしょうか。

地域協働学部が創設されたことは、全国でも初めての試みだったこともあり、非常にうれしかったです。実は今年、県内のある市町村から、地域協働学部の学生に地域に入ってもらいたいとの伝言を頼まれました。学部の名前が浸透し、とても期待されているということが実感できて、とてもうれしかったです。

脇口 地域協働学部の存在が知られるようになってきましたし、地域の方の理解も深まってきたと思います。いいことだけをして去っていく学部じゃないということをお話させていただいたのでしよう。

高知には素晴らしいものがたくさんあります。もっと全国に向けて宣伝し、ブランド



再録・ホームカミングデー記念講演会

高知家総活躍！

元厚生労働事務次官
村木 厚子 氏



記念講演会では「高知家総活躍！」をテーマに、約1時間にわたって講演。約200人の聴衆が、高知県の可能性を語る村木氏の話に耳を傾けました。講演の内容を抜粋して紹介します。

3つの希望とは
少子高齢化社会に見る

日本は、人口減少の時代に入りました。特に生産人口といわれる15～65歳の人口がどんどん減少し、一方で高齢者はばらばら増え続けるため、50年、100年後には1人の現役で1人の高齢者を支えるという大変な時代が来るのが予想されています。しかし、

望みが2つあります。1つ目の望みは、変えられる未来もあるということ。2つ目は、女性や高齢者、障がい者などの人たちが持つ、使われていないパワーがたくさんあるということ。

しかし、社会保障費は伸び続けます。そこで、働き手を増やして税収を増やす一方で、社会保障費をコントロールして抑制しなければなりません。社会保障費をコントロールするために、現在、国は「社会保障と税の一体改革」を進めています。消費税を上げて財源を確保する一方で、社会保障は必要なところを充実させて無駄をなくし、筋肉質なものとしていくなどの取組を行っています。

化すればいいと思いますが、高知の人にとっては当たり前で気が付かない。そのことを伝えるのに、本学の教員や学生が適任です。

村木 高知大学には、他の地域から来た学生や教員が多数いますからね。適度に新しい人が来ることで、高知の良さが発掘できる。よその人の目で見てもらってはじめてわかる良さがあります。地域協働学部をはじめ、さまざまな学部がインターンやUターンの人たちとも一緒にやって、地域全体を盛り上げていけたら面白いですよ。

脇口 そのためには、地域に力がついてくれないといけませんね。地域の産業力とともに必要なのが、教育力だと思います。高知県内どの地域も、高知市内と同等の教育を受けられるようにならないと、特に中山間地域の創生はあり得ません。そのような教育環境の中で、中山間の豊かな自然と触れ合い、地域の人たちに温かく見守られて育つ子どもたちが次代の日本を発展させるエンジンになります。

教育学部には、高知県の教育力をあげるようにハッパをかけているところです。

村木 高知大学は中央から離れており、規模が小さいということもあって、個性を発揮するには知恵を出さないとはいけません。しかし、可能性は高いですよ。地域協働学部のようなユニークな学部ができ、さらに新たな学部の改編も進んでいます。ますますパワーを発揮できるチャンスが出てきたように感じています。

脇口 学生たちが「自分たちで何とかするのだ」というようなうねりを起こしてくれ

誰もが参加できる
社会の実現に知恵を絞る

では、働き手を増やすためにはどうすればいいか。そこで、女性や高齢者の活躍が望まれます。残念ながら日本は、女性の活躍が非常に遅れています。その原因として、日本の女性は、子育ての時期に仕事を辞めざるを得ない状況にあることがわかっています。

子育てをしながら働き続けるために大切なのは、労働時間と職場の雰囲気です。また、夫が家事や育児に参加する家庭ほど、妻は継続的に仕事をし、さらに第2子以降の出生割合も増えることがわかっています。女性が活躍するためには、女性と男性が一緒に、そして、会社や社会全体が変わらなければなりません。

高齢者のパワーをいかに生かすかも、これからの社会の課題です。最近では65歳まで働く人も増えてきましたが、かつての日本は自営業や農業に従事している人が多く、65歳以上の労働力もずっと高いものでした。また、高齢者の就業率が高い地域ほど、後期高齢者医療費が低い傾向にあります。健康に



れば、ずいぶん変わると思います。若者のエネルギーはすごいですから。そのうねりを起こす仕掛けを、教員が作り上げていかなければいけない。

学生たちは大学を卒業し、就職した時に、自分たちが社会や組織をもっと良くしようという意識と意欲を持たなければいけません。そして、その意識がさらに広がって、自分達の国をどうやって活性化し、もっと発展させるのかを考えていくようになってほしい。それが国立大学で学ぶということであり、そのような人材を育てることが国立大学の務めだと思います。

村木 私も高知大学の活動を支えられるよう、中央とのパイプ役として、これからもマッチングなどにお役に立てればと思います。

脇口 本日は貴重なご意見、ありがとうございました。



は「生涯現役が番です。高齢者は元気で働く一方、必要に応じて医療や介護のサービスを利用する。すると医療・介護分野でいい雇用が生まれ、若い人はそこで働きながら子育てができるようになる。このような好循環をつくることできれば、高齢化県でも地域経済が疲弊することはないと思います。

障がい者も大きなパワーです。現在、日本の生産年齢人口の中で障がい者は320万人で、その中で働いている人は数十万人といわれています。うれしいことに、最近の障がい者雇用を見ても、12年間過去最高を更新中です。これからの活躍が期待されます。

土佐にはたくさんの人材がいます。その人たちに県内で活躍してもらおうにはどうすればいいでしょう。それは危機意識をもつて、全員参加の社会をつくることです。子育てや介護中の人、障害を持っている人もみんなが参加できる、働きやすく生産性の高い社会をつくるための知恵を見つけていけません。その知恵を提供できるのが大学という場所。高知県にとつての一番の知恵袋は、高知大学だと思っています。